

繊細な詩歌は靈的伝染によって、世界を救うことができるか？——粗雑な感情は我々を滅びに導く

Greatchain
April 2, 2025

前稿で、私の英語による詩を引用したことによって、私が 40 年近くも放置して気になっていたことが、希望通り生き返った形になった。エミリー・ディキンソンという 19 世紀の詩人が、ずっと私のこの詩に注目し、寄り添っていてくれたことが（タロット占いで）わかった。しかし神秘はこれだけでなく、これを発表して直後に、もう一つ起こった。

私は夢の中で、激しい感情によって、メロディーを口ずさむことはあるが、この夜はなぜか、ずっと「ローレライ」の歌を歌っていた（私はこれを最初の一節だけドイツ語で歌うことができる）。その後にはわかに、ユーチューブの動画に、ドイツ語の書き込みが盛んになり、「ローレライ」歌が入っていた。なぜかわからなかったが、だいぶ前にゲーテの詩「野ばら」に言及したことがあるので、そのためかと思った。しかしよく反省してみるうちに、そうでないことがわかった。これは明らかに（断言できるが）“After Emily Dickinson”という、引用した私の詩が、ハイネの詩「ローレライ」に似ているからであった。それらは共通して、小舟が漕ぎ手もろとも、魔法にかかって急流で難破する話(?)である。もちろん私に作為などなかった。

これは私にとってこの上なく嬉しいことである。力の籠った神秘的とも言える詩が、発揮する力がどれだけ大きいかをそれは実証する。

こういうことは詩だけではない。散文でも同じである。文体というものが、我々全体を生かしても、殺しもする。三島由紀夫が、忘れられない短い言葉を述べたことがあり、私はこれを人々に宣伝したことがある。彼はある所で文体というものを論じて、「私は、冬の朝の武家屋敷の玄関の式台のような文章を書きたいと思っている」と言った——。これはどういう意味か？ そこに我々が感ずるのは——厳しさ、簡素、清潔、礼儀、責任、倫理、それにわずかに漂う殺気である。

これは世にはびこる、だらしのない腐ったジャーナリズムの文章の、対極にあるものである。これは作文の技術などより、精神の規律、その基本的な覚悟によって生まれるものである。そして私が自分の詩「作品」を試みるとき、三島のこの精神を価値の基準としている。

私がことさら、約束の最も厳しいソネットという詩型に固執するのは、あらゆる厳しさ・規律をそこに求めるためであり、いわば人間として、人類としての尊厳、自分は野放図に生きる人間でないという決意を表明するためである。そして最終的に戦いに勝利するためである。

私の言いたいのは無責任なジャーナリズムとは限らない。無責任でだらしない、粗雑な感情から出たものは、我々に仇をなすように返ってくるということである。これに対し繊細で精緻で、霊的に高い次元を目指すものは、弱弱しく見えても、必ず勝利するということである。粗雑で乱暴な唯物論が勝つことはありえない。この世界はダーウィンで押し通せばええじゃないか、円周率などは直径の3倍でええじゃないか、ロシアは加害者・ゼレンスキーは被害者でええじゃないか——そのような粗雑な思考は、強力に見えて、実は極めて脆弱であることが、最近ますますはっきりしてきたではないか？　そういうところから、より繊細な感性を持つ女性の方が、思考の粗雑な男性よりも、この世界を任せるのにふさわしいのではないかという仮説を私は持っている。

同じ詩歌であっても、粗雑な感情を撒き散らすものの代表として、「演歌」というものを考えてみるとよい。演歌にもいろいろあるという人もあるかもしれないが、聞くに堪えないものがある。こういうものは、きまって男女の愛を切々と歌うのだから、「愛の賛歌」として平和の使者をではないかと考える人があるかもしれない。しかしこの「愛」は、我々に求められている高い波動をもつ愛とは、程遠いものである。それはダーウィン進化論と同じように、我々を低次元に押さえておくために仕組まれた、敵の謀略と考えねばならない(たとえ、その意図がないとしても)。我々は賢くならねばならない。我々は自分を滅びに導いてはならない。

ここで私の作品であるソネットを一篇、載せておきたい。これは杜甫の「冬至」という七言律詩の翻案である。詩型はこれまでに載せた2篇と同じだが、押韻は abab/cdcd/efef/gg となっている。これについては、遙か昔、誰か全く見知らぬ外国人が注目して、この詩だけ単独に、ある場所に載せてくれたことがあり、ネットで検索できる。私はこれを、今はこのままにしておくが、もし機会があれば、元通り原詩と日本語読み下し文を一緒にして、何らかの形で全体を翻刻したいと思っている。

Winter Solstice

(from Tu Fu's 冬至)

How often must the day come round to mark
The year's sap at its lowest and to bring

This melancholy with its general dark,
To kill the aged exile with its sting?
I walk the riverside, a cloud forlorn,
Wondering how it is that I could so grow
Conformed to the alien ways of the outmost bourn,
And halt to view the valley after snow.
This stick to prop the withered bag of bones,
I fondly dream, might be a courtier's staff,
And I at this day's rites as morning dawns—
This crazy thought I spurn at once as chaff,
 And faced with bitter facts I lose my mind:
 My homeward way I seek and never find.